

学術資料講演会要旨

晶子に師事した安喜子

～ 同時代の歌人たち～

関西学院大学名誉教授

中島 洋一

1. 題名について

今年の大学図書館特別展の総題は「晶子と安喜子」となっていますが、丹羽安喜子さんの与謝野晶子氏への傾倒師事ぶりは、今日の学生諸君などとは違って誠に誠実なもので、それは2冊の歌集、『芦屋より』と『低唱』の中にも十分に認められる所であり、「晶子と安喜子」と併称するのは、丹羽安喜子さんの本意ではないであろうと推測しまして、「晶子に師事した安喜子」とした次第です。安喜子さんの経歴は別に紹介されていますが、歌壇に最初に登場したのは、第2次『明星』の、2巻3号（1922 大正11 年8月）のようで、2巻6号にも、3巻4号にも「星雲の舞」の新詩社詠草のものの中に安喜子さんの短歌が掲載されています。また 実質上での第3次『明星』とも考えられる『冬柏』では最初は1巻7号（1930 昭和5 年）や2巻当たりでは「新詩社詠草」の中で、他の歌人と一緒に載せられていましたが、3巻1号（1932 昭和7 年）からは独立して、この号では「我が折々」として29首のせられており、晶子とほぼ対等的な扱いを受けています。続いて3巻3号、同12号にもその作品が掲載され、（目次による、実際にはその部分が切り取られている。あきこと仮名書き）その後も多く掲載され、9巻1号（1937 昭和12 年12月）では丹羽俊彦氏の作品も「供華集」と題して掲載され、1938 昭和13 年には「紅楼夢」と題して二に俊彦氏の29首が、三として丹羽安喜子さんの29首が掲載されています。しかし、安喜子さんの作品は1942 昭和17 年13巻の晶子追悼号の「心より泣く」と題する作品が最後のようです。俊彦氏の作品はその後も見出されます。更に与謝野両氏の没後ですが、第3次の『明星』では安喜子さんは編集委員となり、第1巻2号（1947 昭和22 年6月）、3号、2巻3号、4号、5号、6号、3巻3号、4巻3号（終巻号）にも作品を載せ、俊彦氏の作品も1巻4号に出ています。

題についてもう一つ問題があります。実は丹羽安喜子さんが師事したのは与謝野晶子のみではなく、与謝野寛にも師事しています。それは『芦屋より』と『低唱』の歌集によっても分かりますが、殊に『芦屋より』では「与謝野寛先生の霊前に捧ぐ」となっています。晶子は初期では鉄幹の指導を受



けて歌人として成長してきており、『みだれ髪』にも鉄幹の筆がかなり有るのではと推測されています。例えば高村光太郎や北原白秋などの原稿も寛は勝手に改作して不満をかつていることも事実のようです。しかし、『みだれ髪』の場合は恐らく部分的な未熟な語法の修正程度で、晶子自身も晩年はこの『みだれ髪』の用字法を厭い、改作したり、自己の選集の中から省いたりしています。しかし、本質的な面では『みだれ髪』は晶子の独自性そのもので、虎剣調の鉄幹のよくするところではありません。

その門人に対しては、1919 大正8 年10月の『晶子歌話』では「与謝野宅短歌会規定」を次のように定めています。丹羽安喜子さんは丁度この頃、新詩社の社友になり、師事が始まっています。

- 1、会員に加はつて短歌の批評及び筆削をもとめられる数は毎回一人三十首を限ります。
- 1、批評及び加筆は与謝野晶子自ら当たります。
- 1、歌稿を寄せられる度に謝儀として金貳円をお添へ下さい。
- 1、特に与謝野寛の批評及び筆削を希望される人達は、謝儀として毎回金三円をお添へ下さい。

とある。これによると晶子は先生、寛は大先生ということになります。丹羽夫妻も寛をより重しとしていますが、実際は晶子の添削が多かったのではないかと思います。

与謝野晶子と寛とどちらが短歌師匠としては上であるかについては諸説の有るところで、歌人としての名声では晶子が数等上ですが、寛の功績は第一に短歌の革新、寛自身の作品よりも主宰した『明星』で晶子を初めとして詩歌壇に俊秀を輩出せしめたことが挙げられます。晶子、山川登美子、増田雅子、石川啄木、白秋、吉井勇等であります。しかし、玄人筋の一部では、晶子よりも寛の実力を哀惜しています。例えば白秋、吉井勇、釈超空などで、吉井勇は

「晶子夫人にも『みだれ髪』以後『小扇』...等幾多の歌集があったのですが、これらの歌集を一つに集めても、到底この鉄幹先生の『相聞』一巻には及びません。...私としては結局夫人の名声の蔭にあって隠忍しつつも自分の個性を堅持していた鉄幹先生作品の方に、数段上の芸術的価値を見出さずにはいられないのであります。」

と述べています。これにたいして、寛自身は短歌全集の自序で

「かく師友の大恩に感謝を捧ぐると共に、寛はまた妻晶子に対しても深大の感謝を表せずして止む能わず。ああ晶子よ、君こそは現代の極東に於ける天性の叙情詩人なれ...寛の乏しき歌は学ばて後に僅かに之を得たるも、君は然らず、君の着想の富贍と、君の表現の自由と、併せて君の幽妙不可思議なる叡智より電撃的の神速を以て突発し来る。同じく棲むこと三十余年、常に共に筆を執る寛は、常に親しく観て、君の才の天上のものなるに驚嘆し、寛の才の如きは地上の一隅のものなるを思はざるなし。寛は君の歌に触れて開眼せられ、君の創作の神興によつて激励せられしこと無量なり如此くして、寛の君に負う所まことに多し。」

と述べています。鉄幹は晶子との恋愛によって『紫』(1901 明治34 年)では

われ男の子意気の子名の子つるぎの子
詩の子恋の子あもだえの子
そや理想こや運命の別れ路に白きすみれをあはれと泣く身

のように、その歌風も虎剣調の鉄幹から星董調に変わるのであり、晶子の影響の大きさは理解されます。これは余談ですが晶子も常に鉄幹を尊重し、夫婦で寝合っていたのですが、内面では必ずしもいつも仲が良かったというわけでもなさそうです。例えば日夏耿之介氏の指摘では啄木は晶子の歌として「たはやすく生きんが為に埒もなき男と六とせ添臥をしぬ」の歌があると言い、また『白櫻遺芳』の小林政治氏によると晶子の自殺への思いや寛の家出のことが語られています。

しかし最晩年ではお互いに深い愛を確認しあっています。

例えば1934 昭和9 年、晶子の病気の時に、寛は

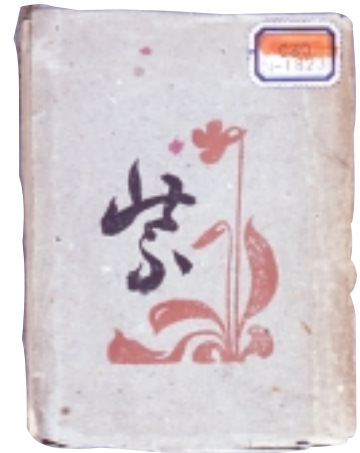
人の屑われ代わりえば今死なん天の才なる妻の命に
ぬかずける心あれども我妻にぬかづかざりき今はぬかづく

と詠んでいます。この時は晶子は回復しましたが、翌年、寛は亡くなります。

これに対して寛が亡くなった後、晶子は

旅をして起きふし君と歌ひつつ経たる月日のなど断たれけん
わが上に残れる月日一瞬によし替へんとも君生きて来よ
まぼろしと三時間ほど語れるも山に來りてのちののどけさ

と歌っています。



『紫』与謝野 寛
(新詩社 1901年)

2. 晶子に師事した安喜子

丹羽安喜子さんは、1919 大正8 年の5月に新詩社の社友となり、与謝野夫妻に師事したのですが、なぜこの時期に新詩社の社友になり、師事することになったのでしょうか？

新詩社は1899 明治32 年11月に与謝野鉄幹が結成し、その機関雑誌『明星』は1900 明治33 年4月に第1号が刊行されています。それから1908 明治41 年11月に百号でもって廃刊されたが、この間 1901 明治34 年3月には鉄幹を誹謗する『文壇照魔鏡』が出て、水野葉舟の語る所では、「五千からの読者を持っていた『明星』の発行部数が半減し、3、4ヶ月後には直接購読者は十数名になつた」というような困難な時期もあったようですが、晶子の『みだれ髪』に代表されるように、ともかくも『文学界』の前期の浪漫主義を更に発展させ、当時の最先端を行く革新的な文学運動でありました。これが百号で廃刊になったのは、白秋、勇、正雄らの脱退や自然主義の台頭や(寛は反自然主義の立場を強く主張していた)経済的な破綻(『明星』は900 から1,200部発行、月に30円から50円の赤字と云われる。)など種々の原因が挙げ

られますが、ともかく鉄幹らの活躍の場は失われることになりました。その後は鷗外らによって受け継がれ、『スバル』の発行がありました。新詩社も一応は存続したようで『トキワギ』が刊行されていますが7号迄でした。第2次『明星』が刊行されたのは1921 大正10 年11月のことで、これは1927 昭和2 年まで続きますが、丹羽安喜子さんが社友になったのはこの間の1919 大正8 年5月で、歌壇的には機関雑誌もなく新詩社は最も低調な時期でありました。



『明星』与謝野 鉄幹（新詩社 1900年）

また与謝野寛は『明星』廃刊後の芸術上の苦悩を打開する為、翌年フランスに渡り、「自分は新生の喜びを知った」と述べていますが、再び歌壇に返り咲くことはありませんでした。1915 大正4 年8月には『鴉と雨』を刊行していますが、その頃アララギ派の台頭がめざましく失意の時代で、その後は新しい歌集の出版もなく、歌壇からは自ら距離を置くような存在でありました。『櫛之葉』（1910 明治43 年7月刊行）では「自らを嗤ふ歌」として

みずからはかなむことを時にするかの定過ぎし子等の如する
わが上に黒き日はきぬ定まれる墓の如くに黒き日はきぬ

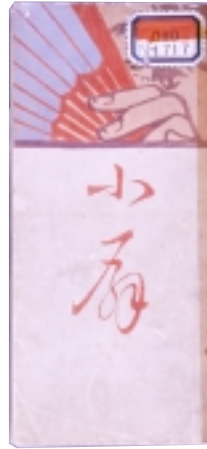
『鴉と雨』では、跋に「当時の自分は幻滅と苦笑と倦怠と焦燥の中に醜く懊悩して居た」といい、

わが心またあらたまるよしなきか路に死にたる人のたぐひか
灰をもて灰に抛つわが事の空しきを以て空しきに泣く

と歌っています。

これに対して晶子は1901 明治34 年の『みだれ髪』以後も『小扇』（1904 明治37 年1月）、『恋衣』（1905 明治38 年1月）、『舞姫』（1906 明治39 年1月）を刊行し、次第に情熱は沈静化に向かっていますが、浪漫的、幻想的な作も多く、積極的な活躍をしていました。その後はやや停滞気味の時期がありますが、1914 大正3 年1月の『夏より秋へ』では、1912 明治45 年5月、夫の後を追って渡欧した時の

作品、



『小扇』与謝野 晶子
（金尾文淵堂 1904年）



『舞姫』与謝野 晶子
（如山堂書店 1906年）

君は憂し千里の遠に居ながらにわれを放たず耳にもの云ふ
来よと云ひ行くべしと書きこの日より初めて夜の住にしこちす
子等おきてかへり見がちに君を追ひ海こゆる日もさはれ疾く来よ
生まれたる日のごと死ぬる日のごとく今日を思ひてわれ旅に行く
わが泣けば露西亜少女来て肩なでぬアリヨル号の白き船室
甲板の靴音きけば淋しさも俄に恋のこころと変る
三千里わが恋人のかたはらに柳の絮の散る日に来る

などが含まれ、優れた特異性が見出されます。その後も1915 大正4 年に『さくら草』、1916 大正5 年に『朱葉集』、『舞ごころも』、1917 大正6 年に『晶子新集』、1919 大正8 年に『火の鳥』、1921 大正10 年に『太陽と薔薇』を出版するように活発に活躍していますが、情熱は沈静化し、旅の歌が次第に多くなり、マンネリ化が見られ、歌壇的にも評価されることが少なくなっています。

このように与謝野夫婦とも歌壇的な活躍、評価の乏しい時期に丹羽夫妻は新詩社に入り、師事しています。その理由は定かではありませんが、丹羽安喜子さんは、『白櫻遺芳』に

「（与謝野先生御夫妻が）歌行脚をお始めになつてから、一、二年目で入らしたと思ひますが、大正八年五月でご座いましたが、与謝野先生御両所が、阪神六甲苦楽園へお越しになりました時に、高安やすこ夫人が（第2『明星』に短歌を発表している）、お会いになりまして、その時、「折角阪神地方へお越しになつた記念に、これからこの地方にも歌会をして、先生の御添削を仰ぎ、また批評して頂くやうに致さうではありませんか」とのことで、歌を志す人を募られました。私は高安さんからお誘いをうけて入会させて頂きました。...阪神地方の知名の所謂名流夫人は、尽く参加されましたといふ感が御座いました。...紫絃社と名づけられたのが、この会の名の始まりで御座います。...一度

歌会が御座いますと、朝日も毎日読売も時事も、記者達が参つて、翌日の新聞には競つて写真や歌が発表されるといふ有様で、華やかな、旺んな会で...それが如何したものか、一、二年致しますと、あらさがし流行ると申してあらさがしへ走り、竹柏会がよしいと申して佐々木先生へ行かれ、或は独立されるなどして一人一人出て仕舞はれ、いつの間にか私がただ一人残つたわけで御座います。...その点両先生も大変よろこんで下さいまして、寛先生は辛抱強いと仰有つて下さいますし、晶子先生はまた「あなただけは変わらないのね、いつ迄も」と喜んで頂いてをりました。」

と当時の状況を回想しています。

3. 丹羽夫妻の歌風と与謝野夫妻の歌風

結局、丹羽夫妻は新詩社の社友にはなりませんが、『明星』派の、『みだれ髪』の

やは肌のあつき血潮にふれも見でさびしからずや道を説く君
乳ぶさおさへ神秘のとばりそとけりぬこなる花の紅ぞ濃き
道をいはず後を思はず名を問はずここに恋ひ恋ふ君と我と見る

などに見出される強烈な浪漫精神、幻想的世界に憧れた故ではなく、1919 大正8 年頃の与謝野夫妻の歌風、旅行脚での比較的に温厚な浪漫的抒情に同調したのではなかろうかと思われる。無論、鉄幹の『東西南北』などの

韓山に、秋かぜ立つや、太刀なでて、われ思ふこと、
無きにしもあらず。
から山に、吼ゆてふ虎の、声はきかず。さびしき秋の、
風たちにつけり。

の虎剣調などではありません。



『東西南北』与謝野 寛
(明治書院 1896年)

丹羽さんが晶子に師事したのは当時の晶子の歌に対する考

え方に同調したからではないかと思われます。それは1919 大正8 年の『晶子歌話』にも「私は専ら私の実感を歌はうと力めました。」とありますが、更に1921 大正10 年刊行の『太陽と薔薇』の自序では「殊に前人の規矩に支配されない私の芸術が其れです。私は自分の個性を自由に表現したいために詩や歌を作ります。私は自分の個性の時々感動の一つ一つ備はつた特殊の表情のあることを信じて居ます。...」といい、また1924 大正13 年5月の『流星の道』では「詩歌の本質」として、

「私は芸術の中で詩や歌は特に自分一人に終始してゐる芸術であると思つてゐます。読者、看者、聴衆と云ふ風に対照を予想せずに、自分の感じたこと自分の云ひたいことを自由に云ひ、自分が作者であると共に読者であり、また批評家であると云ふのが、もともと詩歌の本旨であると思つてゐます。

自己表現の満足 丁度幼い子供が自然に調子のある声で勝手なことを歌つて自ら満足してゐる心もちが詩人の製作の心もちです。詩人の喜びも苦しみも、要するに自分の作物がどれだけ自分の魂の成長を示してゐるか、言ひかへれば、自分が依然たる昨日の旧い「吾」ではなくて、未来の新しい「吾」として生きるまでに成長してゐるか、否か、またその「吾」を遺憾なく完全に云ひ現すことが出来てゐるか否かの二つにあると思ひます。

詩人は自分の内部生活の成長に自ら驚かうとする者です。またその内部生活の不完全を自ら責めようとする者です。」といい、また

「私の愛読する作品は、詩人が一切側目も振らず、最も純粹に、最も正直に、最も大胆に、また最も自由巧妙に、詩人自身の内部生活を歌つた作品であつて欲しいと言ふ事です。詩人が自問自答し、詩人が独り驚き、独りで悲しみ、独りで楽しみつつある心の声、それが聴きたくてなりません。詩人は他に呼び掛けず、無論他に教へようとするやうな余計な事をしないのですが、それでゐて、その詩人の内部生活が真実であり、愛に満ち、新しい美と正義とを創造する能力に富んでさへ居れば、その作品は必ず読者たる我々の人間性に触れて、いろいろの意味で我々の魂の激励となり、我々の生活の最も深い根底となるものに滋味を与へてくれます。この意味で、すぐれた詩歌は現代の人間に触れると言ふことが出来ます。」

とも述べています。これらの書は丹羽記念文庫に2冊乃至3冊あり、安喜子さんもよく読み、共感した考えではないかと思われます。

丹羽さんの歌に対しては、『芦屋より』の序で晶子は、

「私は『芦屋より』の作者を、創作の名にふさはしい真実の歌を作った人として推薦する。歌を作る時の感情は常識的とか、俗情とかを離れて、一段も二段も高く飛躍した特別の興奮を持つ感情である。 中略 そして出来上った歌は一首一首が新しい芸術品でなければならない。私はこの定義の下に、丹羽夫人に託された歌集の歌の選抜をした。そして千百幾十首が残ったのであるが、是を一千首にしてしまふ事はまた私の良心が許さないために半端な数のままにした 中略 夫人が昭和九年の大海嘯に遭遇して、其の一ヶ月の後に送られた詠草は私達二人を深く感動させたものであつたことも一言して置く。」

と記しているが、『芦屋より』は丹羽安喜子さんの3,000首の中から、晶子の厳しい評価を通して撰び抜かれたもので、表現技術の点からも高く評価されるものであるが、晶子も「初めに」で「この作者菜摘み水汲みしてぞ得し法華経か否いつはらぬこと」と歌で批評しているように、いつわらぬ真実の心情が歌われています。またその具体的な例として、晶子も「母の歌多き集かな人の目に武庫の仙女と見えたまへども」と指摘しているように家族特に子供への愛情の強く出たものと言えましょう。例えば

如何ならん神の試しも我れ受けん子の上のみは事無かれかし
幸ひを何にたとへん朝日さす窓に我が子と頼寄する時
わがごとく命を懸けて誓ひつつ頼まん人に子は嫁ぐらん
子が病めば涼しき海の色見ても胸の焼かる心地のみする

そして大海嘯に遭遇しての歌では

父母の霊位を捧げわれ馳せぬ畳も既にただよへる中
布を裂き身を軒端にも結ばんと綱を縋ひつつ寄る水を見る
心さへ裂けて飛ぶやと目を閉ぢぬ津浪に折る下の戸の音
二階より見る我が庭の大水に人流るれど救ふ術なし
命あり手を執り合ひて親と子が津浪の後のたそがれに泣く
水の後のいのちありやと訪ふ人の御声を聞きて涙流るる
畳なき床に綱張り衣干し津浪の後にわぶる秋雨
自動車もピアノも波に没われて誰が物ならん我が濱に寄る

のように日常的でない強烈な心情表現が背景に有るだけに、感動的な作品になっていると言えます。しかし丹羽安喜子さんの歌風の大半は、

彼の夜よりわれ何事を思ふらん心に淡き靄うごくかな
かんざしの絹房めきし白藤の長きをつたひ春のいにけん
高野なる御寺の今日の歌の座を思ひつつ聴く夜の濱の雨
武庫の山谷たそがれて底見えず霧の中にて秋風の鳴る

わが軒に今朝葛城も金剛も晴れてつづけり初秋の空
奈良の雪旅のこころの喜びを我に代りて舞ふ如きかな
白き帆の走るあとより雲動きわがたつ濱に初秋わたる

などの穏やかな心境や印象的叙景歌が多く、俊彦氏の『低唱』の作品などは旅での感懷を歌った温厚な作品で、これらがその中心的作風と思われます。これらは表現技法もしっかりとしており、イメージの豊かな作品であるが、殊に俊彦氏の作品は

鉦はやく太鼓はゆるし川上の百艘の船灯を入れて待つ
湖を二つに裁ちて走る船日傘七色六月の風

のように感覚の冴えがあり、視覚的なイメージの明確な作品が多い。『低唱』の「記」で、俊彦氏が「有り難い過去であり有り難い現在である。 中略 本書は私ども私生活の記録の一部を子供や孫達に伝える為に、私の三百首、妻の五百首を印行したものである。」と述べていますが、確かに家族に伝えるにはよいが一般の読者には、ややもすれば平淡的で、マンネリ化の要素の多くなりそうな傾向があります。ただここでは私の好みから、それ以外のもっと心情表現の強く出た安喜子さんの作品を取り出してみると、

涙しぬ行けど走れどわが路はあまりに遠き空につづけり
すさまじき氷の山の心地して市の中をも我は踏みゆく
人みなに石をば投げて自らも火をあびばやとおもふ夕ぐれ
世と絶ちてわしり来れるここちしぬ素足に磯の沙を歩めば

などには、平生にない強い心情とイメージが歌い出されています。これらの歌を見ると跋文で「奔放で情熱一方で世間見ずの私を大したあやまちもなしに世を渡り、歌集の一つも出すやうにしむけて貰ったのは、ありがたいことだと思ひます。」と述べている点と思い合わせて、丹羽安喜子さんの生涯は温厚な夫君に愛され平穏な生涯を送られたのですが、もし状況が変わっていれば、或は与謝野晶子のような熱烈な恋愛と情熱的な作品を生みだし得たかも知れないと思われます。ただ与謝野晶子にはより強烈な、幻想性と自信、自己うぬぼれがあり、また生活力バイタリテイもあります。それは11人の子供を育て、明治の末頃からは婦人問題で論陣を張り、幾多の著書を出し、文化学院の学監も勤め、その生涯の歌集は27冊、短歌数は17,075首とも3万首とも推測されています。短歌のみでなく詩も小説も童話も、また源氏物語を初めとする古典の新訳も多数刊行しており、その活躍は誠に凄まじいものがあります。その点では安喜子さんは家庭人で大人しい方のように思われます。

4. 晶子の象徴短歌論

このころの晶子の歌論に『晶子歌話』があり、象徴短歌について述べていますが、この考え方にはかなり問題があります。それについては別の機会に詳論したいと思います。丹羽安喜子さんの短歌への影響は認められないので、ここでは簡略に述べるに止めたいと思います。『晶子歌話』では、象徴的な歌を二つに分け、第一種として

悲しみにこころは舵を失ひぬ南を北として辿り行く
吉井 勇
裸にて小き抜手の真似をしぬ一歳の児も冒険のため
与謝野寛
菊さきぬ寒き思ひを持つ我に似たる淋しき白き顔して
晶子

等の例歌を挙げ、「以上のやうに興行を持った歌が私達の云ふ象徴的な歌の一種です。」という。そして「昔の人はかう云ふ象徴的な歌を評して、「余情がある」とか、「聯想に富んで居る」とか云ひました。それは之が象徴詩の一体であることに気が附かなかつたからです。」といっています。この程度のものを象徴詩というのであればフランスの象徴詩とは殆ど関わりのないものといえましょう。これらの例歌は比喩的要素が強く、伝統的な象徴的表現の観点からみても幽玄、妖艶、「さび」などとも関わらないものといえます。



『晶子歌話』与謝野 晶子
(天佑社 1919年)



次いでその第二種とは「象徴的の第二種は、第一種に比べると、もう一層暗示する所が深いのです。」といい、

- 1、群青の海のうねりの傾けば白き一雙の鷗流る
与謝野寛
- 2、美しき囃しばかりを耳にして脱殻に寄り灰色を嗅ぐ
寛
- 3、大風に鴻の鳥啼く二方に吹き分けられて見難しと啼く
寛

4、塔の身は木隠れてのみ在り難し山辺に立ちて風に吹かる
晶子

等を挙げています。そして1では「表面は鷗の歌のようですが、実は平和と美と愛との中に快潤な生活を送らうとする作者の理想を暗示して居るのです。」、2では「感覚的な気分を歌ひながら、この中に、表面は美しく賑やか相で、実質は空虚である倦怠な生活が暗示されて居ます。」、3では「之は何かの大きな災害に由つて、俄に恋人同士が遠く別れねばならなくなつたとか、また友と友とが志しを失つて離散したとか云ふ事の悲痛を暗示して居るのです。」、4は「高い理想を持つて居る者は、じつと控目にばかりしては居られません。その理想を実行したいために険峻な所にも身を挺して、世の非難や苦痛をも嘗めます。」とそれぞれを解釈しているが、しかし、いずれも観念的比喩の要素が余りに多く、象徴短歌とは言い難いように思われます。晶子は更にこれに続けて、「象徴的な歌の第二種がどう云ふものであるかは、以上の解説でその一斑を想像して頂くことが出来るでせう。要するに之は、作者自身にはよくその意味が解つて居るのは勿論ですが、読者から御覧になると、作者から一つの美しい「謎」を提供されて居るやうなものです。作者は説明せずに、一つの謎を出して、「之を当てて御覧なさい」と云つて居るのです。其処で読者は自己の直観力の大小鋭鈍に応じて、その謎を解かうとします。」と述べています。謎ときは知的観念的な作業で、情調象徴を主とするべき短歌の象徴には相応しい言葉ではありません。また「猶、象徴的な歌は私達に始まつたものではありません。記紀万葉を初め古来の歌集の中の秀歌は悉く象徴的な歌の二種の何れかに属しています。」といいますが、秀歌即象徴と言う考え方では象徴の本質、特に近代の象徴性は捉えられ無いであろうと思われます。結局、晶子の象徴理念には感覚の照応や音楽性が不十分で、近代のフランスの象徴主義とは関わりの少ないものであったように思われます。

5. 丹羽記念文庫について

これは丹羽安喜子さんの蒐集された近代短歌を中心とした2,192冊の記念文庫ですが、安喜子さんは自分の歌人としての好みから集めたもので、必ずしも系統立てた近代短歌の集成ではありません。安喜子さんは寛、晶子に師事していますから『明星』派、殊に与謝野両氏の作品が多く、すべてに近いと思われます。それは寛のものが30冊、晶子のものが103冊（共著を含む）と全集の13冊。但し同じ書物で重複しているものもあり、例えば『みだれ髪』は初版（1901 明治34 年版、奥附きには鳳晶子とある。新聞進一氏の説では再版は現存し

現存しない。）、3版（1904 明治37 年版）が2冊、4版（1906 明治39 年版）、角川文庫14版 1964 昭和39 年版、附みだれ髪拾遺）の5冊があります。『小扇』は1904 明治37 年の初版本の1冊だが、『舞姫』、『夢の華』、『左保姫』は初版本が2冊、『春泥集』は1911 明治44 年の初版本はなく1913 大正2 年の7版が3冊、『青海波』は初版本が2冊の外、1913 大正2 年版と1918 大正7 年版的の4版と併せて4冊もあります。この外『歌の作りやう』は3冊など。逆にないものは童話集で『絵本お伽噺』（1908 明治41 年）、『藤太郎の旅』（1925 大正14 年）など、感想文『心頭雑草』（1919 大正8 年）、『愛の創作』（1923 大正12 年）、『沙にかく』（1925 大正14 年）や、また寛との共著『満蒙遊記』（1930 昭和5 年）などです。寛のものでは1915 大正4 年の最後の歌集『鴉と雨』は見あたりません。



『みだれ髪』与謝野 晶子
（新詩社 1901年、金尾文淵堂 1904年、金尾文淵堂 1906年）

『明星』は全巻揃っていた筈ですが、実際には1902 明治35 年、1903 明治36 年、1906 明治39 年のものが見あたりません。ただ1号から5号までは新聞版のもので、貴重本といえます。『明星』は第3次迄あり、第1次は1900 明治33 年4月から1908 明治41 年11月迄、概ね月刊で全百号。第2次は1921 大正10 年11月から1927 昭和2 年4月迄、48冊。以上は寛の主宰ですが、第3次は寛、晶子の没後、1947 昭和22 年5月から1949 昭和24 年10月まで、16冊、与謝野光の主宰。これに対して『冬柏』は1930 昭和5 年3月から1952 昭和27 年3月まで刊行され、新詩社系で寛、晶子の生前中は両者を中心にしており、実質上の第3次『明



『冬柏』
（冬柏発行所 1930年）

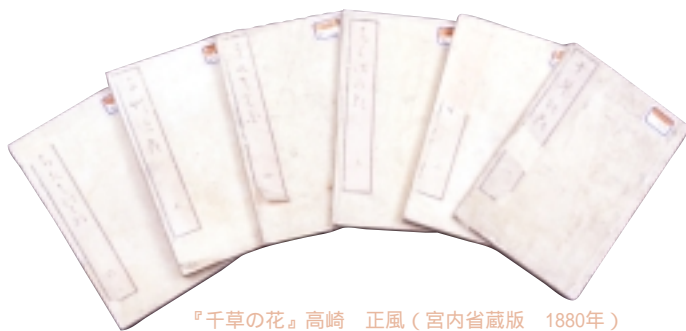
星』と考えることができます。この丹羽記念文庫では丹羽安喜子さんの社友になった1919 大正8 年以後の第2次『明星』と『冬柏』が深く関わり、恐らく全巻揃っていた筈ですが第2次『明星』の1号から3号（1922 大正11 年）と第4巻の下にも欠号があります。また『冬柏』は一応、1930 昭和5 年から19年までありますが、11冊ほどの欠号があります。相対的に雑誌の保存状態は良くありません。

『明星』は第1次のものが文芸史的意義が高く認められているのに、第2次のものは余り認められていないのは何故でしょうか。いずれも寛が主宰し、執筆者は何れも時代を代表するメンバーであるが、時代の変化で浪漫主義から自然主義への時代、歌壇史的に云えばアララギ派への展開によるものとはいえその落差は大きい。第2次『明星』でも例えば創刊号に白秋の詩「落葉松」や光太郎の詩「雨に打たるカテドラル」などの秀作が載せられており、もっと評価されて然るべきものと言えます。これらは今後の研究課題ですが、ただ、それらはそれぞれの作者の評価に繋がるのみで雑誌の評価にはなっていません。それは第1次『明星』では独自の主張がありました。例えば1900 明治33 年9月の「新詩社清規」では「一、われらは互いに自我の詩を発揮せんとす、われらの詩は古人の詩を模倣するにあらず、われらの詩なり、否、われら一人一人の発明したる詩なり。」「一、われらの詩は内容たる趣味に於て、詩の外形たる調諧に於て、ともに自我独創の詩を楽しむなり。」「一、かかる我儘者の集まりて、我儘を通さんとする結合を新詩社と名づける。」の如くかなり強く独自性を主張しています。これに対し、第2次『明星』の創刊号の編集後記とも云うべき「一隅の卓」では、「『明星』には窮屈な主義主張も無い。唯だこの小さな草紙の上で、幾人かの同人が之を機縁に益々人生と学問芸術とに対する愛を深め、誠実と敬虔と刻苦とを以て特殊な各自の自由な表現を試みたいと思ふばかりである。…このやうな理由で出す『明星』には、只今の処、対社会的には何等の抱負も持たせて居ない。…旗幟を樹て派を称して他と争ふ如きは、固より『明星』の志で無い。我々同人はジャーナリズムの埒外にあつて各々自恣の生活に耽らうとする者である。」と述べているのであって、そこに意気込みの差、主張の特色が無い。また、第1次『明星』では次々と有力な新人が発掘されたのに、第2次『明星』では第一で活躍した者が多く、新鮮味の欠けるところが大きかった故では無いかと思われます。

雑誌の主要なものでは、『よしあし草』の14号、15号、19号、22号などがあり、この内22号には晶子の短歌が3首出ています。『小天地』、薄田泣菫らの編集になるもの、1900 明治33 年10月から1903 明治36 年1月まで、通巻25冊が揃っています。『スバル』は1909 明治42 年から1913

正2 年まで通巻60冊の内、1909 明治42 年の3号と6号が欠けているが他は揃っている。『アララギ』は11冊ほどあります。

雑誌以外の主なものは、高崎正風編の『千草の花』（1880 明治13 年）、『天長節歌解』（1891 明治24 年）。海上胤平の『長歌改良論弁駁』（1889 明治22 年）、『歌学会歌範評論』（1893 明治26 年）など胤平のものが5冊。佐々木信綱の『校註明倫歌集』（1892 明治25 年）、『歌の栞』、『この花』（1897 明治32 年）など信綱関係のものが50冊。大和田建樹の『応用歌学』（1894 明治27 年）、『新体詩学』（1900 明治33 年）など建樹のものが13冊。末松謙澄の『国歌新論』（1897 明治30 年）。金子薫園の『片われ月』（1900 明治33 年）など薫園のものが30冊。正岡子規の『竹の里歌』（1904 明治37 年）など子規のものが5冊。落合直文の『萩之家遺稿』（1904 明治37 年）。尾上柴舟の『銀鈴』（1904 明治37 年）など柴舟のものが17冊。窪田空穂の『まひる野』（1905 明治38 年）など空穂のもの22冊。森鷗外の『歌日記』（1907 明治40 年）、『沙羅の木』（1915 大正4 年）鷗外のはこの2冊のみ。若山牧水の『海の声』（1908 明治41 年）など牧水のは33冊。吉井勇の『酒ほがひ』（1909 明治42 年）など勇のものが33冊。前田夕暮の『収穫』（1910 明治43 年）など夕暮のものは17冊。土岐哀果の『黄昏に』（1912 明治45 年）など哀果のもの15冊。尾山篤二郎の『さすらひ』（1913 大正2 年）など篤二郎のもの18冊。北原白秋の『桐の花』（1913 大正2 年）など白秋のもの19冊。木下利玄の『銀』（1914 大正3 年）など利玄のもの8冊。島木赤彦の『切火』（1915 大正4 年）など赤彦のもの8冊。茂吉の『赤光』（1919 大正8 年版）など茂吉のもの6冊。中村憲吉の『林泉集』（1920 大正9 年）など憲吉のもの5冊。小泉萠三の『遅日集』（1932 昭和7 年）など萠三のもの9冊。



『千草の花』高崎 正風（宮内省蔵版 1880年）

その他、詩集では島崎藤村の『夏姫』（1898 明治31 年）、『落梅集』（1901 明治34 年）、『ローマ字藤村詩集』（1917 大正6 年）、薄田泣菫の『白玉集』（1905 明治38 年）、『二十五絃』（1905 明治38 年）、『落葉』（1908 明治41 年）。相馬御風の『御風詩集』（1908 明

治41 年）など御風のもの9冊。土井晩翠の『天地有情』（1899 明治32 年）。堀口大学の『パンの笛』（1919 大正8 年）など大学のもの5冊。三木露風の『白き手の狩人』（1913 大正2 年）、『幻の田園』（1915 大正4 年）、『露風詩話』（1915 大正4 年）。



『落梅集』島崎 藤村
（春陽堂 1901年）

なお与謝野晶子展が1943 昭和18 年3月2日から7日まで、京都の丸物百貨店で行われ、丹羽安喜子さんが晶子の著書109冊（全集を含む）を展示していました。この外、晶子の羽織、単衣、帯、ハンドバック、帯留め、草履も出品。また丹羽俊彦氏は小屏風（歌5首）、水盤、火鉢、香合、茶碗、菓子器などを出品されていました。



中島 洋一（なかじま よういち）

関西学院大学名誉教授

1953(昭和28)年関西学院大学文学部卒業、1958(同33)年関西学院大学大学院日本文学専攻博士課程修了。文学博士。専攻は日本文芸学。著書に『日本文藝理論における象徴的表現理念の研究（関西学院大学研究叢書 第24篇）』（風間書房 1966年）、『象徴詩の研究：白秋・露風を中心として』（桜楓社 1982年）などがある。